

研究課題	世界を変える力となるコンピテンシーを育む
副題	～地域や世界とつながる主体的・対話的で深い学びの具現化～
キーワード	コンピテンシー・深い学び・ICT 活用
学校/団体名	新潟大学附属新潟中学校
所在地	〒951-8535 新潟県新潟市中央区西大畑町 5214 番地
ホームページ	http://jhs.niigata.ed.niigata-u.ac.jp

1. 研究の背景

社会や経済の混乱，低迷，生産人口の減少の一方で増加する外国人労働者，情報化やグローバル化の進展や技術革新等により，社会構造や雇用環境が大きく変化を遂げる時代。このような社会に参画する生徒は，決まった答えのない未曾有の事象，目標や理念を失う現象，傍観者の傾向など，これからの社会で生じる新たな問題を解決していくことが求められる。

その中において新学習指導要領で示されている教科等で育成する3つの資質・能力「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」を発揮して，教科の授業や特別活動等で学んだことを，社会で起きている事象・現象等の理由や背景につなげることや，OECD Learning Framework2030においてキー・コンピテンシーの育成が求められている。つまり，学校教育を通して，様々な変化に向き合い，ジレンマと向き合い乗り越えられること，他者と協働して課題を解決することや，新たな価値の創造に責任をもってやり遂げる資質・能力の育成が急務となっている。

だからこそ，生徒は，与えられた課題を追究し，決められた知識を学ぶだけではなく，自ら課題を見出し，これまでの自分の既存の知識と新しい知識とを関連付け，自分にあった方法で課題を乗り越え，自分がかかわる世界(人，もの，こと)をよりよい方向へ変える力を身に付けることが必要である。

2. 研究の目的

当校の教育目標は，「生き方を求めて学ぶ生徒」である。この「生き方を求めて学ぶ生徒」の具体的な姿は，「自らの目標を設定し，目標達成に向けて，学んだことを既存の知識や新しい知識を関連付けて，自分の生き方を求め続けることができる生徒」である。社会とのかかわりの中で，自分が向き合うべき課題を見つけ，課題の解決に向けて，主体的に取り組んだり，他者と協働したりしながら，学び続けることができる生徒の育成を目指している。

先が見えず，正解のないこれからの時代を生きる生徒にとって，そこで生じる新たな問題について，背景や立場が異なる他者を尊重し，協働しながら最適解を見いだしていくことが求められている。だからこそ，生徒には，背景や立場が異なる他者と協働する際，異なる考えが表出される中で，目的と方法の整合を図り，妥協点を見いだしながら対立やジレンマを乗り越え，自分がかかわる世界をよりよい方向に変える力が必要となる。

このように自分がかかわる世界をよりよい方向に変えていこうとする際，ICT 活用の議論は不可欠である。なぜなら，様々な背景や立場が異なる他者と出会い，協働することが加速しているのは ICT の進展の賜物に他ならないからである。また，デジタルネイティブとも言われる生徒たちが生きるこれからの世界は今よりも一層 ICT 活用と切ってみ切り離せない世界になると考えられるからでもある。

一方，令和2年度までの当校の教育活動における ICT 活用状況は限定的なものであった。授業での ICT 活用は，一定程度行われていたが，主に教員が視聴覚機器を活用することにどまっていた。生徒が主体的に ICT を活用することで，自分がかかわる世界をよりよい方向に変えていこうとする資質・能力までは育成できていなかった。その要因の一つとして，GIGA スクール構想に向けた環境整備が不十分であったことが挙げられる。今年度当校では，生徒・教員へのタブレット端末の貸与，ネットワーク環境など環境整備が進められ，ICT 活用を念頭に置いた教育活動を実現することが期待される。

以上のことから，本研究では，生徒が ICT を活用しながら，自分がかかわる世界をよりよい

方向性に変える力となるコンピテンシーを育むための教育活動のあり方を明らかにする。特に、次の2点からコンピテンシーを育むための教育活動のあり方を探る。1点目は、ICTを活用した教科学習のあり方である。これは、ICTの長所と各教科の本質を照らし合わせることで、ICT活用のための教科学習ではなく、教科学習のためのICT活用のあり方を探ることを意味する。2点目は、ICT活用の長所と短所を生徒と教員で吟味する活動のあり方である。これは、ICT活用のあり方を吟味することを通して、生徒が自身のあり方を顧みる活動のあり方を探ることを意味する。

- | | |
|---|-------------------------------|
| 1 | コンピテンシーを育むためのICTを活用した教科学習のあり方 |
| 2 | コンピテンシーを育むためのICT活用を吟味する活動のあり方 |

3. 研究の経過

本校の研究部を本研究の研究組織の中心に位置付け、全職員で研究に取り組んだ。その一部を抜粋して掲載する(表1)。

表1 研究の過程

時期	取組の内容	評価のための記録
4月2日(金)	・ 職員研修(研究概要の説明, 各教科等授業案の提案)	提案資料
4月5日(月)	・ 職員研修(各教科等授業案の提案, 特別活動研修, カリキュラム・マネジメント研修)	提案資料
6月4日(金)	・ 職員研修(ICT実践研修①)	提案資料
6月16日(水)	・ GIGA開き全校集会	パワーポイント資料
6月~7月	・ 研究授業□(公開授業・協議会)	観察記録・写真・資料
8月3日(火)	・ オンライン授業づくり研修会(社会・数学)	提案資料・参加者アンケート
8月3日(火)	・ 職員研修(ICT実践研修②)	提案資料
8月~10月	・ 研究授業□(公開授業・協議会)	観察記録・写真・資料
9月10日(金)	・ 視察受け入れ(ICT実践の視察, 新潟県立翠江高等学校2名)	資料
10月16日(土), 10月22日(金)	・ オンライン教育研究発表会	提案資料・参加者アンケート
11月26日(金)	・ 視察受け入れ(ICT実践の視察, 新潟県立新潟南高等学校4名)	資料
12月22日(水)	・ 生徒アンケート調査	生徒アンケート
12月27日(月)	・ オンライン教育課程研修会	提案資料・参加者アンケート
2月22日(火)	・ 職員研修(授業実践の振り返りについて)	教師の所感(ポストイット)
3月8日(火)	・ 職員研修(今年度の振り返りと次年度の研究の方向性について)	教師の所感(ポストイット)

4. 代表的な実践

(1) コンピテンシーを育むためのICTを活用した教科学習のあり方

○ 代表的な実践として英語科における実践を紹介する。

① 単元名

Lesson 3 Every Drop Counts(NEW CROWN English Series 2)(2年)

② 目標

台湾の学生と環境問題の解決策を、There is/are構文や動名詞を用いた表現を使い分けたり、異なる文化、考えをもつ台湾の人に配慮したりしながら話し合う活動を通して、よりよい解決策を見つけ出すことができる。

③ 実践の概要

本単元では第2学年英語科の授業で生徒が一人一台のパソコンを活用し、10名の留学生

に対して附属新潟中学校の学校紹介を Zoom ミーティングを活用して行った。

生徒はこれまで、クラスメートやALTを相手に、「日常的な話題」についてコミュニケーション活動を授業で行ってきた。本研修の主題である「自分の考えを即興的に伝え合う生徒の育成」に加え、より難しい「社会的な話題」で行うことに挑戦するため、台湾の学生と互いの環境問題の解決策を話し合う活動を設定した。生徒はリアリティのあるこの課題に向き合い、解決したいと強く願って目的意識が醸成されたと考えた。また、異なる文化的背景に気付き、会話の内容を工夫したり、聞き取れなかったことを確認したりといった、コミュニケーション相手への配慮を、英語の運用能力とともに身に付けさせることを目指した。それらの課題やプロセスを生徒と教師が授業の中で共に見つけ、実行していくことを主な手立てとした。

④ 単元の実際

本実践では主に以下の手立てを考案し、実践に取り組んだ。

台湾の学生と環境問題の解決策を話し合う文脈を設定する。

台湾の学生から、環境問題の解決策について話し合う機会をもつことを生徒向けのメッセージとして提案してもらった。生徒はこれまでよりも難易度の高い内容を英語で話し合うことができるだろうかと思いがもてないが、なんとかやり遂げたいと考え、以下の課題を見い出した。



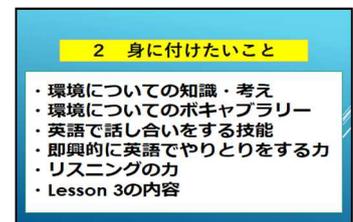
【図1】 課題設定の際に提示したスライド

<課題>台湾の学生と英語で環境問題の解決策を話し合おう。

設定した課題について、生徒は解決する必要性ややりがいを感じているが、実際にどのような話し合いになるのか、解決した具体的な姿を思い描くことはできていないため、次の手立てを行った。

台湾の学生と環境問題の解決策を話し合う姿をイメージし、そのために必要なプロセスを考案し、追究する活動を組織する。

英語科の教員が、台湾の学生役や中学生役に分かれて、予想される話し合いの様子を演じ、目標となる話し合いのモデルとして映像で見せた。この映像を見ることにより、目標の姿と自身の現状を見比べ、生徒は今の自分の力では課題を解決できないということをより強く感じた。そこで、「台湾の学生と環境問題の解決策を話し合うためには、どんなことが必要だろうか？」と生徒に問うた。生徒は言語的な能力とトピックの内容的な知識の両面で、足りていないものを考え、右の内容を挙げた。



【図2】 生徒と共有した単元で身に付けたい知識

そして、「教科書内容を学習し、新出文法や語彙を身に付ける」「環境問題について知り、語彙を増やすため、環境問題を扱った英文を読む」「話し合うための表現を使いながら、環境問題を話し合う練習をする」といった生徒が考案した学習プロセスを単元の中に組み込んでいった。

ALTを相手に、環境問題の解決策を話し合う活動を組織する。

単元の途中で、環境問題の解決策を話し合う活動を、ALTを相手に試した。生徒は、語彙や即興的な表現力など言語運用能力に関わる困難を改めて感じ、ALTから日本と外国とでは違っている部分について指摘を受けた。自分たちが当たり前だと考えていることが、相手にとっては当たり前ではなく、文化的背景が異なることに配慮する必要があることに気付いた。生徒はこれまでのプロセスでは不十分であると考え、目標に異なる文化的

3 目指したいパフォーマンスの姿 (思考力・判断力・表現力)		
自分の考えを伝え合う	文化的背景の違う台湾の方に配慮	環境問題の解決策を話し合う
A Stage 3で即興的に理由をつけたり、相手と理解を確認したりしながら意見を言えた	日本と台湾の違いを明確にし、文化の違いにふれ、尊重しながら話している I heard ~. In Japan ~.	グループで解決策を導いた
B Stage 2で、自分の番で環境問題について意見を言えた	日本と台湾の違いを理解しながら話している In Japan, ~.	
C 意見を言えなかった	一方的に自分の考えを	グループで解決策を

【図3】 生徒と作成したルーブリック

背景をもつ相手への配慮を加え、右のルーブリックを教師とともに考えた。

さらに、英語教師との練習や、ALT との練習を重ね、台湾の大学生との交流当日を迎えた。生徒は「練習よりも即興性を意識して話すことができた。会話の流れで臨機応変に文を変えて伝わりやすくしたり、質問をしたりすることができた。」「日本と台湾では文化や生活が違うから、日本では当たり前でも他の国では当たり前ではないということを実感した。分からないことを前提として、言い換えて伝えることができた。」など、英語の運用能力とともにコミュニケーションの相手への配慮を身に付けたことを実感していた。



【図4】
オンラインで台湾の方と交流している様子

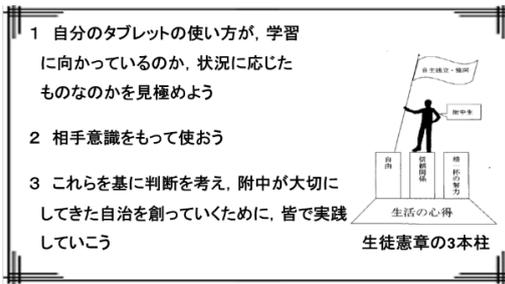
(2) コンピテンシーを育むための ICT 活用を吟味する活動のあり方

エージェンシーを発揮させる領域活動の実施—生活指導部による附中 GIGA 宣言の作成—について紹介する。

当校では今年度の6月からタブレット端末の活用を行い始めた。その際、生活指導部長の生徒の「これをきっかけとして附中をよりよくしたい。」という思いをもとに、今後、生徒が GIGA スクール構想の目的を理解し、その恩恵を最大限受けるため、さらに附中が大切にしてきた自治の大切さ、また自治とは何かを全校で考えることをねらいとし、附中 GIGA 宣言を作成することとした。

以下のような流れで活動が進み、作成に至った。

- ① 生活指導部長の思いを担当職員が聞き、今後の進め方を検討
- ② 生活指導部長が生活指導部に自分たちで作る附中 GIGA 宣言の必要性を語りかけ、部員と合意し、その後の進め方を検討
- ③ 全校朝会で生活指導部長・副部長が、全校に附中 GIGA 宣言作成の意義を共有
「先輩たちが憲章を創ってきたように、GIGA スクールに関しても、自分たちで創って、守っていくのが真の附中生である。」「言われたとおりに従うきまりではなく、我々の判断のものさしを創っていこう。」
- ④ 学級で、予想される心配な使い方や、なぜそれが不安視されるのかまで掘り下げて話し合う
実際の話し合いの様子
 - ・「ルールを守れなかった時に、罰が必要なのではないか？」
 - ・「附中生はルールがなくても守れるはず。附中生は何が良いか悪いかわかっている。」
 - ・「附中生だから大丈夫だと思うけど、一応のため必要なのではないか。」
- ⑤ 生活指導部員が学級から挙げた意見の共通する部分に着目しながら、判断の際に立ち返るべきことを見だし、全校に提案
- ⑥ 附中 GIGA 宣言を発表



【図5】作成した附中 GIGA 宣言



【図6】学級での話し合いの様子

タブレット端末のよりよい使い方を自分たちで考える中で、附中生としてのよりよい在り方を求めて、自治とは何なのか、皆で正しい判断をしていく意義など、本質的な議論をしている場面が見受けられた。さらに、生活指導部長は活動後に全校に向けて「全校で思いをひとつに創りあげたこの GIGA 宣言は、今後のタブレットの使い方の基盤になります。GIGA 宣言を作成している生徒一人一人の姿は「自主独立・協同」そのものでした。熱意をもって創りあげたものだからこそ、どんな場面においても自ら考え、正しい使い方を追究していったほしいと思います。」と述べ、今後も自分たちでよりよくなっていきたいという思いを全校で共有することができた。

1 学期終業式以降、試行期間としてタブレット端末の持ち帰りをを行い、現在は学校生活すべての場面、家庭で生徒が活用している。活用の場面が増えることで、新たに検討しなければいけない課題も出てきている。それらを基に、宣言を見直す機会を設け、自分たちのよりよいあり方を考えさせていく機会としたい。

5. 研究の成果

教育活動アンケートの結果から得られた次の2つを今年度の研究の成果とする。

質問項目	肯定的評価の割合
生徒が情報を収集、整理・分析、まとめ・表現する際に、テレビ会議システムの活用が有効であった。	8割
テレビ会議システムを用いた交流活動で得た知識・考えが、世界の見方やかかわり方を変容させ、自分のかかわる世界をよりよい方向へ変える実感を得た。	8割
附中 GIGA 宣言をつくり上げる活動を通して、自分のあり方を見直すことができた。	8割

今年度、総合的な学習の時間の授業や英語の授業、生徒会専門部の活動において、生徒たちは Zoom や Google Meet を活用して海外・県外の生徒と主体的に交流することができた。そのように様々な人との出会いを通して、新たな世界の見方やかかわり方に知り、自身のかかわる世界をよりよくしていこうという意思・意欲を醸成することができたと考えられる。

また附中 GIGA 宣言をつくり上げる中で、生徒たちは自分の目指す学校生活や学びのあり方を見つめ直すことができたと考える。

6. 今後の課題・展望

今年度当校では、生徒・教員へのタブレット端末の貸与、インターネット通信環境の整備がなされた。また Google Workspace を活用し、生徒・教員のクラウド上での作業が可能になった。このようなハード面での環境整備が今年度の研究の推進力になったことに間違いはない。しかし、それが新潟大学附属新潟中学校という文脈の中で生きて働く実効性のある ICT 活用環境になるためには、ソフト面での環境整備が欠かせなかったと考える。つまり、ICT 活用に対する校長・教頭の強力なリーダーシップと、ICT 担当教員の適切な校内研修を抜きにして、今年度の当校の研究はなしえなかったと言っても過言ではない。そのように ICT 活用に関する教師間の働きかけや教員間で質問し合える風土の醸成が、ICT 活用の推進には不可欠である。

一方で、ICT 活用に関する教師と生徒間での働きかけや支え合える風土の醸成には改善の余地がある。ICT 活用のあり方を生徒ともにこれからも考えていきたい。その活動を通して、生徒策定した「附中 GIGA 宣言」を絵に描いた餅にすることなく、絶えず生徒が自らのよりよいあり方を求め続けられるようにしていきたい。それは、近年注目されているデジタルシティズンシップに他ならない。そのような新たな視座から、さらに ICT 活用のよりよいあり方を生徒と一緒に考えていくことが今後の課題となる。

7. おわりに

最後に、今年度の当校の研究を進めるにあたり、福井大学教授・木村優先生、新潟大学教職大学院准教授・一柳智紀先生には、貴重なご助言と多くの励ましのお言葉をいただきました。ここに記して厚く御礼申し上げます。また、生き方を求めて学ぶ姿を体現してくれた生徒の皆様にも、この場をお借りして御礼申し上げます。

8. 参考文献

- ・ 文部科学省(2019)『学習指導要領』
- ・ 奈須正裕 他(2015)『教科の本質から迫るコンピテンシー・ベースの授業づくり』図書文化
- ・ 奈須正裕 他(2015)『知識基盤社会を生き抜く子どもを育てる コンピテンシー・ベースの授業づくり』ぎょうせい
- ・ 当校研究紀要 第60集(2018)「豊かな対話を求め、確かな学びに向かう生徒を育む授業(2年次)」
- ・ 当校研究紀要 第61集(2019)「豊かな対話を求め、確かな学びに向かう生徒を育む授業(3年次)」
- ・ 田村 学(2018)『深い学び』東洋館出版社
- ・ 新潟大学教育学部附属新潟中学校 (2017)『附属新潟中式「3つの重点」を生かした確かな学びを促す授業—教科独自の眼鏡を育むことが「主体的・対話的で深い学び」の鍵となる!』東信堂
- ・ 新潟大学教育学部附属新潟中学校研究会(2018)『附属新潟中式「主体的・対話的で深い学び」をデザインする「学びの再構成」』東信堂